

とあるウサギの吊籠生活（ダイスンスーン）

ヨイヤサ・リングマスター

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

真面目っぽく書いたデモンズソウルのユルトさんが主人公の短編です。
ギヤグっぽいタイトルですが、いつかデモンズソウルの二次小説を書くときの練習作
品ですので気楽に読んでみてくださいw

目次

とあるウサギの吊籠生活（ダイスンスー
ン）

とあるウサギの吊籠生活（ダイスンスーン）

……私は暗殺集団『沈黙』の長、ユルトだ。

今回かなり厄介な依頼が来たので私が直接出向くことになつたのだが……やれやれ。どうにも役に立たない部下ばかりだ。私について来れる力量の者が一人もいないとは。

あの女、確かメフィストフェレスと言つたか。

どうせ私のところに依頼を持つてくる他の連中と同じく本名ではないだろうがあの女の依頼では北の大地ボーレタリアにいるソウルの秘密を知る者を皆殺しにするんだつたな。

全く骨の折れる仕事だ。

そうして私はいつものように二本のねじれた角をあしらつた兜とそれと同色の真っ黒な鎧を着込む。

これまで多くの英雄を殺してきた私にとつて色のない濃霧に覆われたボーレタリア

の英雄を始末することなど容易い仕事だ。

しかも今回は『ソウルの秘密について知るだけ』の者を殺しても報酬が出るのだから暗殺者としては最高の仕事だな。

この時の私は自分がこの色のない濃霧から生きて出ることが出来ないなどとは露ほども思つていなかつた。

……まさか私がこのような吊籠に閉じ込められるとは屈辱だ。
デーモン共も愛用の武器、ショーテルでいくら斬りつけても平然とするなんて。
どうやら私としたことがデーモンを侮つていたようだ。

こうして殺さずに生かしているのは私に利用価値があるからだろう。
こうなればこの吊り籠が開いた時に逃げる計画を考えねばなる、人が来たようだ。

どうせソウル目当てでこの国に来た馬鹿か、英雄願望のある馬鹿だろう。
この吊り籠から脱出したあとは紳士的に振る舞い、あとで始末してしまえば問題ない

だろう。

「貴公、デーモンに敵する者か」

「ここはあくまで紳士的な振る舞いだ。

この色のない濃霧に覆われたボーレタリアで数少ない同じ人間を見捨てる者はおるまい。

この男も英雄願望があるなら私を助けるはずだ。

「であれば私をここから解放してほしい。

私の思いは貴公と同じだ。

……何よりもデーモンと闘うために」

そう言うと男はすんなり鍵を開けてくれた。

「助かったよ貴公の顔、覚えておこう。
いずれ見える時もあるだろう」

漸く自由になつた私はここからの脱出方法を考える。

メフィストフェレスの依頼も早く済ませなくてはならないしな。

……この高さでは自殺行為だな。さてどうするか……

しばらくウロウロしながら考えていると背後から私を助けた男に突然斬られた。

……なぜ？私の演技は完璧だったはず。

「あんた『沈黙』の長ユルトだろ。

あんたの事は魔女のユーリアからよく聞いてるよ。

ソウルについて知る者を殺してるんだろう？

じやあ殺される前に俺が殺しても文句はねえよな」

ば、馬鹿な！

私としたことがなんというミスをしてしまつたんだ！

この国に来て最初の獲物として闘い、あと少しまで追い詰めたユーリアが断罪者ミラ

ルダと王の公吏に捕まつたのを見て、どうせあいつらが始末するだろうと死体の確認を後回しにしたツケがここで来るとは……

私は常の冷静さを失い思考の海に翻弄される。

「俺はユーリアと付き合つていてね。

俺の彼女があんな異常者とブヨ虫に捕まるきつかけになつたのがあんただと知り、さらにつこのラトリアに幽閉されていることを知つたからあんたを殺すために来たんだよ」

男は武器を大剣に変え、再び斬りつけてきた。

ダメージ自体は大したことはなかつたが男の剣が触れた瞬間、嵐のような突風を感じ、私の体はさつきまでいた塔からたたき落とされた。

何てことだ。

私は暗殺集団『沈黙』の長ユルトだ。

それがこんなところで死ぬことになるとは……

塔から落ちる最中私は走馬灯を見るることはなかつた。

それは人を殺しすぎたために死が身近すぎたからだろう。

6 とあるウサギの吊籠生活（ダイスンスーン）

だが後悔はしていない。

これが私の死に様というのも……悪くない。

「ダーアイスンスーン！」

最後に叫んだこの言葉は何を意味するのか私にもわからない。

そこで私は意識を手放した……。